

# LIBRARY NAVIGATOR

120<sup>th</sup>  
ANNIVERSARY  
since 1905

立命館大学図書館  
開設120周年記念特集号

ISSN 1345-3343



**R** RITSUMEIKAN  
UNIVERSITY

## CONTENTS

ご挨拶	仲谷 善雄 総長	2
対談	平井嘉一郎氏が私たちに遺したもの、私たちが未来へ引き継ぐもの 平井 信子(平井嘉一郎記念財団理事長) 樋爪 誠(立命館大学図書館長/立命館大学法学部教授)	3
	デジタル・アーカイブの現在、デザイン・アート学が拓く未来 赤間 亮(デザイン・アート学部長/デザイン・アート学研究科長) 松葉 涼子(デザイン・アート学部教授)	9
寄稿	立命館大学図書館開館120周年に寄せて 吉田 美喜夫(元立命館大学図書館長/立命館大学名誉教授)	15
	平井嘉一郎記念図書館10周年に寄せて 二宮 周平(元立命館大学図書館長/立命館大学名誉教授)	16
	「学びが見える、学びに触れる、学びあえる」の更なる発展を祈念して 小久保 みどり(前立命館大学図書館長/経営学部特任教授)	17
	びわこ・くさつキャンパス三十数年の歩みと二つの図書館 里深 好文(前立命館大学図書館副館長/理工学部長・理工学研究科長)	18
	統計でみる図書館120周年	19
	図書館120周年のあゆみ	21
	歴代館長一覧	27



## 図書館開設120周年を記念して

仲谷 善雄 総長

本学図書館の歩みは、立命館大学の前身である京都法政学校が1900(明治33)年に創設された5年後の1905(明治38)年、広小路校舎に図書室が附設されたことに始まります。以来120年にわたり、本学図書館は教育・研究活動を支える知の基盤として、その時代ごとの要請に応えながら発展を遂げてまいりました。

特に、本学卒業生であり、立命館名誉館賓 故・平井嘉一郎様の御遺志を引き継がれた、御令室・平井信子様(立命館名誉館賓)からの御寄附により、2016(平成28)年に平井嘉一郎記念図書館が衣笠キャンパスに新設されたことは、大きな飛躍の機会になりました。同館は「学びが見える、学びに触れる、学びあえる」をコンセプトに、ピアラーニングルーム「ぴあら」やプレゼンテーションルームを設け、大学図書館の新たな姿を示す存在として、学外からも注目されてきました。本年、開館10周年という節目を迎え、多くの方々のご支援に支えられながら、その役割を果たしてきました。

120年に及ぶ本学図書館の発展の歩みは、蔵書の充実にも表れています。附設当時約2,200冊であった蔵書は、新制大学移行の翌年である1949(昭和24)年には10万冊に達し、1984(昭和59)年には100万冊を超えました。現在では、約350万冊を所蔵しています。本だけでなく、雑誌約64,000タイトル、E-Journal(SFX登録数)約65,000タイトル、視聴覚資料約70,000件が利用可能です。また、平井嘉一郎記念図書館の地階には、学祖・西園寺公望(1849~1940)より生前三度にわたって寄贈された蔵書を母体とする「西園寺文庫」をはじめ、貴重書・準貴重書約6万冊が収蔵されており、学内外の多くの利用に供されています。

利用状況に目を向けると、年間入館者数は1960年代には約10万人規模で推移していましたが、学部新設や学生数の増加とともに伸び、近年では年間約130万人が利用する知的交流の場となっています。これらの数字は、本学図書館が学修・研究の中核として確固たる存在感を築いてきたことを物語っています。コロナ禍においても、電子ブック・データベースの拡充や郵送貸出(返却)サービスの実施など、可能な限りのサービス継続に努めたことは、利用者から高く評価されました。

現在、本学は京都、滋賀、大阪に、4キャンパス17学部22研究科を擁し、それぞれの研究領域を支える7つの図書館を有しています。これらの図書館は、全構成員の知的活動を支える拠点であると同時に、「次世代研究大学」の実現に向けた不可欠な基盤として、その機能の高度化とサービスの向上に努めています。

近年、オープンサイエンスの推進や学術情報流通の変化を背景に、大学図書館には、デジタル化やDX(デジタルトランスフォーメーション)への対応が強く求められています。本学図書館もまた、多様な学術情報資源の共有拠点として、その役割を一層深化させていく必要があります。

立命館が創立以来掲げてきた建学の精神「自由と清新」、すなわち自由にして進取の気風は、図書館の歩みにも脈々と受け継がれています。図書館開設120周年、そして平井嘉一郎記念図書館開館10周年という節目にあたり、これまで本学図書館を支えてこられたすべての関係者の皆様に心より感謝を申し上げますとともに、今後も本学図書館が知的活動の拠点として、次代を切り拓く学びと研究を力強く支える次世代研究大学の基盤プラットフォームとしての発展を期待いたします。

## 120th Anniversary

# 平井嘉一郎氏が私 私たちが未来 たちに遺したものの、 へ引き継ぐもの



樋爪 誠 氏  
立命館大学図書館長(立命館大学法学部教授)



平井 信子 氏  
平井嘉一郎記念財団理事長

立命館大学図書館が創立  
そして、衣笠キャンパスの学術研究の拠点である「平井  
この大きな節目を前に、本図書館の  
平井嘉一郎記念財団理事長・平井信子氏と、樋爪誠  
対談では、平井嘉一郎氏が抱いた「若  
いかにして本図書館の設立へと至っ  
平井氏の生前のエピソードや開館までの経緯を通じ、

120周年を迎える2025年。  
嘉一郎記念図書館」が開館10周年を迎える2026年。  
誕生に多大なるご尽力をいただいた  
立命館大学図書館長による対談が実現しました。  
い人たちの力になりたい」という志が  
たのか、その歩みを振り返ります。  
私たちが未来へ引き継ぐべきものについて考えます。

### 次世代育成への先見性 平井嘉一郎氏が抱いた少子化への懸念

樋爪誠図書館長（以下、樋爪）：それでは、平井嘉一郎様のご令室であります平井信子様から、「平井嘉一郎氏が私たちに遺したもの」というテーマについてお話しいただきたいと存じます。まずは平井嘉一郎氏の生前のお考えについてお聞きしたいと存じます。

平井信子理事長（以下、平井）：主人・平井は、生前から少子化が進む状況を非常に心配しており、次世代育成への尽力を惜しみませんでした。少子化が社会問題として注目される10年以上も前から日本の現状を洞察し、いち早く行動を起こしたのは、やはり平井の先見性の一端ではなかったでしょうか。

具体的には、会社創立40周年の1990年（平成2年）8月1日、この年の人口動態統計の結果、出生率



が1.57人となり、丙午だった1966年（昭和41年）の1.58人を下回る史上最低の結果になったことに心を痛めておりました。このまま少子化が進めば高齢化が加速し、国や地方自治体において大きな問題になることを、私にもよく話し、心配していたと記憶しております。

そこで、平井は「少子化への対策として、次世代を担う子どもたちの心身に合わせた健康、成長に役立つ環境整備等に」との目的で、本社のある京都市をはじめ、亀岡市・草津市・豊科町・大野市など事業所のある13の自治体に対し、総額1億円余りの寄付をさせていただきました。お金で解決されるものではありませんが、少しでも行政における施策の一助になればとの思いで寄付をさせていただいたと聞いており、その後、「さらに若い人たちの力になりたい」そんな思いをよく、私に話していました。

## 若き研究者の志を支える 「平井嘉一郎研究奨励賞」の創設

樋爪：平井理事長、ありがとうございました。2001年1月20日に平井嘉一郎氏が93年のご生涯を閉じられてからは、理事長がその意思を引き継がれ、継続したさまざまな社会貢献事業が行われてきたとお聞きしております。本学との関わりの深い事業についてお尋ねしたいと存じますが、まずは2006年に嘉一郎氏の母校である本学・法学研究科大学院生を支援する「平井嘉一郎研究奨励賞」を創設された経緯についてお聞きしたいと存じます。

平井：あれは2005年(平成17年)12月ごろ、生前平井がよく話していた「若い人の力になりたい」という思いを形にしたいと常々考えておりました。平井が立命館大学法学部の卒業生であったことから、当時の法学部事務長を



訪問し相談させていただいたところ、「若い学生を支援いただく絶好の内容があります」とご提案いただいたのが、法学研究科と法務研

究科の大学院生を対象にした「平井嘉一郎研究奨励賞」の始まりでした。

第1回の授与式は2006年(平成18年)6月23日、当時の長田総長により開催いただいたことを鮮明に覚えております。昨年5月には第20回目を仲谷総長に開催いただき、これまで99名の受賞者を輩出することができました。

樋爪：「平井嘉一郎研究奨励賞」は来年度に21回を迎え、研究者の輩出といった観点では、これまで11名の教員を輩出しており、学内にも2名の教員が所属しています。

## 学術研究の拠点誕生 平井嘉一郎記念図書館に 込められた願い

樋爪：続いて、2016年4月に開館し、早くも10周年を迎えようとしております「平井嘉一郎記念図書館」についてお聞きしたいと存じます。1967年から長年にわたり本学学生の学びを支えてきた衣笠図書館に代わる「平井嘉一郎記念図書館」は、これまで育まれてきた学びの文化をしっかりと継承し、更なる深まりを見せてくれることを期待しています。この図書館の設立にご寄贈いただきました理由や、ご決断をいただきましてから開館するまでの思い出に残るエピソードについてお聞かせいただきたいと存じます。

平井：今でも覚えています。2009年(平成21年)6月24日でした。当時の図書館長・

吉田先生と法学部事務長の中山様が私の事務所を訪問され、吉田先生より唐突に「立命館大学衣笠キャンパスに図書館一棟を寄贈願いたい」と申し出られました。私も先生の勢いに押され「はい」とお返事した記憶がございます。

それからは、図書館建設の打ち合わせ・設計・建設と進み、吉田先生のお話から7年後の2016年(平成28年)4月1日、気品があり重厚感あふれる、平井嘉一郎の名を冠した「平井嘉一郎記念図書館」が、この京都衣笠の地に学術研究の拠点として誕生することになりました。この間、多くの皆様にお世話になり、特に当時の専務理事であり現在は理事長であられる森島理事長様には、大変お世話になりました。

先ほど樋爪図書館長様より、立命館大学図書館創設120年とお聞きし、平井嘉一郎記念図書館も120年の歴史の内、やっと10年が経過し、少しはお役に立てたのかなと思っていました。来る4月1日、平井嘉一郎記念図書館は開館10周年を迎えることとなります。この10年間、樋爪館長様をはじめ図書館スタッフの皆様には色々とお世話になり、利用者が年々増加しているように聞いています。ありがとうございます。

「主人の生前の願いであった『若い人たちの力になりたい』という思いが、わずかでも形にできたのではないかと感じております。時折、泉下の主人と語り合うような心持ちになることがあり、主人も頷きながら喜んでくれて

いるように思われます。今後も少しずつ主人の思いを形にすべく、社会貢献活動に努めてまいりたいと考えております。よろしくお願いたします。



## 未来への展望 時代が変わっても輝き続ける 「知の宝庫」として

樋爪：本日は短い時間ではございましたが、『平井嘉一郎氏が私たちに遺してくださったもの』という、少し抽象的なテーマについてお話を伺わせていただきました。

最後に「私たちが未来へ引き継ぐもの」、言い換えれば「私たちが未来へ引き継がねばならないもの」について、僭越ながら述べさせていただきたいと存じますが、その前に、平井嘉一郎記念図書館は2026年度に開館10周年を迎えます。この先、10年後、20年後、平井嘉一郎記念図書館がどのような存在であって欲しいのか、そして、立命館大学に対する期待や要望についてお聞かせをいただけませんかでしょうか。

平井：昨年の4月1日、学校法人立命館の機構内に平井嘉一郎顕彰事業本部を創設いただきました。そして約1年が経過し、スタッフの皆さんのお陰をもって、順調に顕彰事業を進めて来ることが出来ました。また、この顕彰事業本部創設にともない、平井嘉一郎記念図書館の将来における経常的資金、また顕彰事業本部活動資金についても、立命館大学で管理いただく「平井嘉一郎基金」として整理をいただいたことにより、安心できる状態となりました。



それぞれの資金についても、私は出来る限りの協力をさせていただきたいと思っています。この先どれほど時代が移り変わろうとも、立命館大学が益々発展し、知の宝庫である平井嘉一郎記念図書館が、いつまでも若い世代の力となり続けることと、さらに、平井嘉一郎顕彰事業本部の活動がより一層推進され、平井嘉一郎の功績が末永く顕彰されますことを、私は心より願っております。

樋爪：ありがとうございました。今回、このような対談を実施させていただいたのは、図書館開館10周年を迎えるにあたり、平井信子理事長、平井嘉一郎記念財団スタッフの皆さまをはじめ、『平井嘉一郎氏が私たちに遺してくださったもの』への深い感謝の念があったからにほかなりません。この場をお借りし、改めて厚く御礼申し上げます。



「平井嘉一郎研究奨励賞」や「平井嘉一郎記念図書館」がなぜ設立され、現在の私たちにもたらしているものを理解しようとするとき、『平井嘉一郎氏が私たちに遺してくださったもの』に思いをはせることが重要であることは、言うまでもありません。私たちが未来へ引き継がねばならないものとは、まさにそうした精神ではないでしょうか。本日は、貴重なお時間を頂戴しありがとうございました。

## 平井嘉一郎メモリアルルーム



愛用品やゆかりの資料などを展示



受賞された紺綬褒章



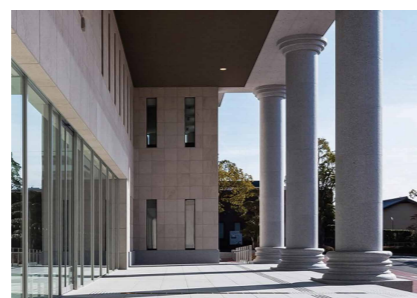
ご愛用されていたメガネ

メモリアルルームは、平井嘉一郎様を末永く顕彰する目的で設置された。嘉一郎様の愛用品やゆかりの資料、嘉一郎様の歩みと功績を記した年表、そしてニチコン株式会社の製品、立命館との関連などの資料を展示している。「平井嘉一郎研究奨励賞」や「平井嘉一郎記念図書館」の設立に込められた理念と、平井嘉一郎様が私たちに遺した学術的・精神的遺産を紹介する展示空間である。



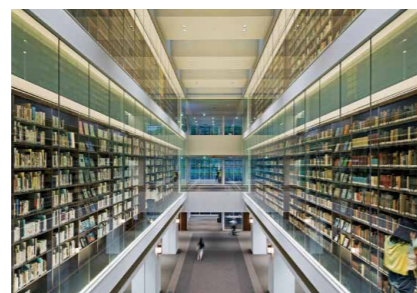
平井嘉一郎記念図書館

嘉一郎様のご遺志を引き継がれた平井信子様のご寄付によって2016年4月1日に開館。1階エントランスには、平井嘉一郎様の座右の銘「天知る 地知る 己知る」などの銘文が掲げられている。総座席数2000席、白川静文庫・加藤周一文庫などを含む多様な資料を100万冊以上収蔵。仲間と共に問題解決を図り、社会で体験した学びを共有する新しい学習・教育スタイルを実践、発信できる施設が整っている。



エントランス

アカデミックシンボルとして格調と重厚感ある外観を構成。入口には、ウォークスルーで貸出手続きができる国内初のゲートを設置。



ライブラリーパレー

3層吹き抜けのシンボリック空間。透明ガラスが各エリアをゆるやかにつなぐことで、学びと本の風景が一体化。



びあ

仲間と声を出してディスカッションやプレゼンテーションをしたり能動的な学びが可能。



白川静文庫・加藤周一文庫

本学にご縁のあるお二人の蔵書や関連図書等を一部開架している。

## デジタル・アーカイブの現在、 デザイン・アート学が拓く未来

立命館大学図書館が昨年120周年を迎え、平井嘉一郎記念図書館が本年(2026年)4月に開設10周年を迎える節目に、衣笠キャンパスでは、17番目の学部として「デザイン・アート学部」が誕生します。

1998年に設置されたアート・リサーチセンターが、約30年をかけ蓄積し構築してきたデジタル・アーカイブに関する知見は、新学部でどのように展開されるのか。

「デジタル・ヒューマニティーズ」に関する研究を、国内でいち早く実践されてきた赤間教授と木版画を中心とした出版文化史をご専門とする松葉教授に、新学部でのこれからの学びの在り方について語っていただきました。

### 赤間 亮 氏

デザイン・アート学部長、デザイン・アート学研究科長。  
日本文学(近世演劇)専攻。  
アート・リサーチセンターセンター長として、長年、日本文化資源のデジタル化と国際共同利用・共同研究を牽引。

### 松葉 涼子 氏

デザイン・アート学部 教授。  
近世文化史・出版史専攻。  
大英博物館等の海外拠点での経験を活かし、デジタルと実物を融合させた研究を展開。

### デジタル・アーカイブ学への原点

—— デザイン・アート学部、デザイン・アート学研究科の教員お二人のご専門をお聞かせください。

赤間:日本のデジタルアーカイブを研究する研究者としては一番古い部類になってきています。デジタルアーカイブという言葉が生まれる前から40数年来この分野の研究に携わっています。本来の専門としては日本の近世演劇史、浮世

絵、そして、デジタルアーカイブの3つということになります。

松葉:私は近世文化史の中でも木版画の出版史を専門として位置づけています。

私は卒業生で、赤間先生の指導の下、提出した博士論文は近世演劇をテーマにしたものでした。

卒業後、イギリスの大英博物館での勤務の中、2017年「北斎展」、2019年「マンガ展」の国際企

画展に携わる中で、資料保存ということから企画展に関する資料をアーカイブし、国際的に資料を共有しながら企画をまとめていくということに関わったことがありました。

その中で、近世期の絵入版本と近代の漫画は、研究分野が分かれており、歴史的に接続しないという認識があり、それを出版史、出版形態として捉えた場合にどのように繋がられるかというところを考えました。そこから、今現在は、出版史、版画にお

ける出版史と素材としての和紙、絵具やそれらを作っていく道具の関わりを研究しています。

### アート・リサーチセンター約30年の軌跡

—— アート・リサーチセンターが歩んできた約30年間の転換点について教えてください。

赤間:私が若手から中堅へと差し掛かる頃、当時の研究の種を大きく育てる挑戦として立ち



上げたのがアート・リサーチセンターでした。1998年に文部科学省の「学術フロンティア推進事業」に採択されたことが大きな契機となりました。

当時は文学部の川嶋将生教授を筆頭に、理工学部の八村広三郎教授、ゲーム・アーカイブ研究の細井浩一教授、そして稲葉光行教授といった多様な分野の教員が集まりました。主題を「都市と芸能」、副題を「無形文化・時間芸術に関する研究」に掲げ、当時はまだ誰も想像できなかった「無形文化をデジタルで記録・分析する」とい

う、まさに夢のようなテーマからスタートしたのです。

翌年には専用の建物が完成し、地域研究の一環として、京舞・能楽の人間国宝を輩出する片山家の「能楽・京舞保存財団」と学術協定を締結しました。こうして貴重な実資料を対象に、伝統芸能の本格的な研究ができる環境が整っていきました。

——そこからさらに、映像学部の設立やグローバルな展開へと繋がっていくのですね。

赤間：ええ。2001年には「デジタル時代のメディアと映像に関する総合的研究」がオープン・リサーチ・センター整備事業に採択されました。これが2007年の映像学部開設の伏線となります。ほぼ同時期、文部科学省の「21世紀COEプログラム」において「京都アート・エンターテインメント創生研究」が始動しました。情報学の専門家が加わり、学内から30名以上の研究者が参画する本格的な文理融合研究が動き出したのです。

その後、2007年の「グローバルCOEプログラム」では、それまでの蓄積を若手研究者の育成という「教育」に活かす方向へ舵を切りました。八村先生らと議論を重ねる中で、2004年頃から世界的に注目され始めていた「デジタル・ヒューマニティーズ」という概念をいち早く取り入れたのもこの時期です。この枠組みの中で多くの院生や若手研究者が世界へ羽ばたきました。当時、ポストドクターとして活動されていた松葉先生は、この現場をどのように見ていましたか？

松葉：人文学研究者として、当時はまだデジタルを用いた研究手法にどこか曖昧さを感じていた時期でした。しかし、まさにこのプロジェクトを通じて「日本文化デジタル・ヒューマニティーズ」に出会い、自らの思考や手法を拡張していくような感覚を体感しました。技術を駆使して国内外の文化資源を整理し、そこから新しい研究方法を導き出す。その可能性を確信したのが、私にとっても大きな転換点でした。

赤間：2014年には、外部の研究者がアート・リサーチセンターのデジタルアーカイブと環境を利用してプロジェクトを行う「共同利用・共同研究拠点」となり、2019年には国内7つ目の「国際共同利用・共同研究拠点」に認定されました。私立大学の文系組織としてこの認定を受けることは極めて異例であり、現在も120件を超えるプロジェクトが世界中から集まっています。この30年間の歩みが、私たちの活動がトップランナーとして認知される確かな土台となっています。

### 図書館とデジタルアーカイブの共創 知の集積をクリエイティブの「素材」へ

——図書館との連携における展望はいかがでしょうか。

赤間：図書館は知がアーカイブされている拠点、アート・リサーチセンターはその知をデジタル情報に変換し「分析・活用」する拠点という補完関係にあります。正直なところ、これまで十分に連携しきれなかった部分もありますが、新学部（デザイン・アート学部）はその2つの拠点の連携をデザインしていく役割を果たせると考えています。新学部の学生が主体的に図書館とアート・リサーチセンターを繋げていく。そこにアーカイブが産み出す創造性が見えてきます。

松葉：アーカイブ化において重要なのは、その資料のどこに価値があるかを見極める「専門家の眼」です。例えば、肉眼ではとらえきれないような微細な筆致や和紙の



先人の思考のプロセスを辿りながら自分の感性で知を新しく組み立て直す

質感までを鮮明に浮かび上がらせることで、資料は初めて生きた情報になります。そうして質の高いデータとして可視化された知の集積を、新しい表現を生むための「素材」として学生たちに手渡していきたいですね。

### 新学部の展望 身体感覚とアーカイブがつなげる創造性

—— 2026年度に始動するデザイン・アート学部が目指す核心とは何でしょうか。

赤間: キーワードは「CX(クリエイティブ・トランスフォーメーション)」です。人文学の深い洞察とデジタル技術を掛け合わせ、社会に新しい価値を提示していく。その核となるのは、自らの中にある「美的感性」の発見です。美的感性は人から教えられるものではなく、多様な文化資源や文化的活動に触れ、試行錯誤を繰り返す環境の中で、自分の中から引き出されるものです。

松葉: 学生には、アート・リサーチセンターが蓄積した膨大なアーカイブを縦横無尽に使いこなしてほしいですね。

過去の知を一旦バラバラにし、先人の思考のプロセスを辿りながら自分の感性で新しく組み立て直す。最近のAIなども、そうした自分自身の視点や審美眼があって初めて、有効な道具として使いこなせるものだと思います。

赤間: そうですね。教育の場もキャンパスにとどまらず、街全体を学びの場と捉え、京都の伝統産業の現場などで先人の知恵を学び、それを現代の表現へと繋いでいく力を養ってほしいです。

松葉: デジタルで解析した知見を携えて実物の資料や職人の技に触れる。デジタルとフィジカルの両面を理解して初めて、先人の知恵を現代に活かす力が身につくのだと考えています。

大英博物館での経験でも、デジタル化によって物理的な距離を超えた「知の共有」が進むのを実感しましたが、新学部でも世界中の資料を比較研究できる環境を整えていきます。

赤間: テクノロジーが進化した最後に問われるのは、やはり「なぜこれをつくるのか」という人文学的な問いです。

図書館の静謐な空間の中で古典の世界と対話し、ラボでは最先端の技術を駆使する。この往復こそが未来を切り拓くしなやかな感性を育てると信じています。

—— 図書館も、新学部の学生たちの自由で創造的な活動を全力でバックアップしていきます。ありがとうございました。

古典の世界と対話し、最先端の技術を駆使。この往復こそが未来



### 今回の対談で取り上げられた施設の紹介



アート・リサーチセンター

1998年設立のアート・リサーチセンターは、私たち人類が持つ文化を後世に伝達するために、有形・無形の人間文化の所産を、歴史的、社会的観点から研究・分析し、記録・整理・保存・発信することを目的に活動を行っています。



和紙シンポジウム

令和7年度大学における芸術家等育成事業・国際シンポジウム「和紙と木版画:江戸・明治から現代、そして世界へ」展示会の様子(2026年2月20日、於立命館大学ARC)。国内外の若手アーティスト10名が、日本の和紙を用いた木版画作品を発表。伝統技術の現代的需要と国際的な広がり示した。

## 立命館大学図書館 開館120周年に寄せて

元立命館大学図書館長／立命館大学名誉教授  
吉田 美喜夫



2026年、「平井嘉一郎記念図書館」(以下「平井図書館」)が衣笠の地に誕生して10年となる。同時に、立命館大学に図書館が設けられて120年という年ともなる。

平井図書館は、本学法学部の卒業生であるニチコンの創業者「平井嘉一郎」氏の遺志を受け継がれたご令室・平井信子様のご寄付を元に建設された。

このご寄付をお願いに上がった2009年10月当時、私は図書館長を務めていた。今でも、ご快諾いただいた時のうれしさを思い出す。この嬉しさに支えられ、その後、建設を準備する委員会において平井図書館を形あるものにするための仕事をさせていただいた。

ところで、図書館は単なる大きな書庫でも読書室でもない。では、どの様な図書館であるべきか。平井図書館の建物の構想と並行して、この問題の検討が進められた。その際、図書館関係者が、日本の大学だけでなく、アメリカ東部のハーバード大学など6大学を訪れ、ラーニング・コモンズ(「学びの共有地」以下「LC」)という新しいコンセプトを学んできた。LCとは、学生が学ぶために出向いて、いろいろな知見を刈り取ってくる場所という意味である。これを受けて、図書館を「学びが見える、学びに触れる、学び見える」場所とすることが構想されたのである。

この構想は、大学における教育の在り方とも結びついている。LCのコンセプトは、衣笠キャンパス全

体を「学びのコミュニティ」とする構想と共通しており、平井図書館は、学生が「自由に集い学びあう場所」である「学びのコミュニティ」の中核拠点と位置づけられたのである。このような構想を確定した政策文書が『衣笠キャンパスにおける「学びのコミュニティ」形成に向けて』(2010年3月17日)である。

LCのコンセプトを形にするため、平井図書館には、静謐な空間だけでなく、討論する空間、憩う空間、カフェなどが配置されている。上の階に行くにつれ色調も落ち着けるように、そして多様な形式の椅子や机を配置して長時間滞在したくなる工夫も凝らされている。

図書館は変化する存在である。書物が増えていくだけでなく、研究や教育の在り方の変化に対応していく必要がある。その時間的スパンは数十年を単位とすることになるであろう。平井図書館は、設計に当たり、長寿命型の図書館として常に時代の変化に応じ進化する建物となるための柔軟性が織り込まれている。

私が図書館長だったとき、「大学には図書館がある。さあ、図書館へ行こう!」というメッセージを学生の皆さんに贈ったことがある。この思いは今も変わらない。平井図書館が、在学中だけでなく、卒業後も訪れて見たい場所であり続けてほしいと願っている。

## 平井嘉一郎記念図書館 開館10周年に寄せて

元立命館大学図書館長／立命館大学名誉教授  
二宮 周平



2016年4月、平井嘉一郎記念図書館が開館した。私は当時、図書館長だった。開館時のセレモニーで、本図書館を立命館大学図書館ではなく、平井嘉一郎記念図書館と呼んで欲しい旨述べた。それは次のような理由による。

嘉一郎氏は立命館大学法学部経済学科卒業生であり、現在のニチコンの実質的創業者である。氏は、次代を担う若人の役に立つことを考えていた。信子夫人はこの遺志を実現するために「平井嘉一郎記念財団」を設立し、社会貢献活動をする中で、本学法学研究科大学院生の研究支援を行う「平井嘉一郎研究奨励賞」を設けた。

吉田美喜夫法学部教授はこのご縁から、図書館長の時代に信子夫人に対して図書館一棟のご寄贈をお願いし、一緒に米国有数の諸大学の図書館を見学するなどして、実現に至った。暑い夏、信子夫人は建造中の建物を訪れ、作業に従事する人たちにアイスクリームを用意するなど、完成を心待ちにされていた。嘉一郎氏の遺志を叶えたい、顕彰したいという思いの深さを感じた。開館後、図書館に来られた際に、ご挨拶やお礼を述べる学生に接すると、こぼれるような笑顔で応えられていた。嘉一郎氏と信子氏お二人の意志を象徴するのが図書館の命名だと思うのである。

平井嘉一郎記念図書館には、嘉一郎氏のメモリアルルームと共に、2つの文庫がある。漢字研究の泰斗であり、文化勲章を受賞した本学文学部教授の白川静と、思想家、評論家として世界的に活躍し、本学国際平和ミュージアムの初代館長を務めた加藤周一である。それぞれ書籍や創作に至る過程のノート、諸資料等の寄贈を受け、それらを整理し、可能なものは閲覧に供している。特に、加藤文庫は、その大半の著作の手稿をデジタルアーカイブ化し、海外からもアクセスできるようにしている。本図書館は、学生・院生・教職員・市民の学びの場であると同時に、2つの文庫を通じて学問や知の世界がどのようにして築かれたのか、その情報発信の場でもある。まさに大学の図書館としての本分を全うしているように思う。

このような平井嘉一郎記念図書館の館長を務め、館員のみなさんと一緒に内容の充実に取り組んだことを、私事ながら、誇りに思っている。

「学びが見える、  
学びに触れる、学びあえる」  
の更なる発展を祈念して

前立命館大学図書館長／経営学部特任教授  
小久保 みどり



昨年、立命館大学図書館は開設120周年を迎え、OICライブラリーは10周年を迎えました。また、平井嘉一郎記念図書館が今春10周年を迎えました。

近年の図書館の歴史の中で、2015年大阪いばらきキャンパスが開設され、同時にOICライブラリーが開館しました。2016年には衣笠キャンパスに本学法学部の卒業生で、日本有数のコンデンサメーカー「ニチコン株式会社」の創業者・故平井嘉一郎様の御遺志を引き継がれた御令室・平井信子

様の御寄附により平井嘉一郎記念図書館が開設され、2年続けての図書館設立という画期的な出来事となりました。両館ともにキャンパスの知的創造活動の象徴として、高等教育と学術研究活動を支える情報基盤として、旧来の図書館と比べるとよりゆとりと快適性(居心地の良い空間で健康的な学びを促進するといった意味での)、開放性にあふれた主体的な学びを形成するための学習空間・環境を提供しており、そのことは、以下のような5つの特徴に現われています。

- 自主学習を支援するキャレルデスク、共同学習を支援する「びあら」などリラックス空間・交流としての多様なスタイルの学習環境を整備していること
- 明快でゆとりのある書架・閲覧席の配置、視覚的にもオープンなデザインにより、全ての人が情報へアクセスしやすいバリアフリーに配慮した計画にしていること
- 内装・家具の設えにオリジナルのデザインを採用し、照明の色合いにも変化を持たせ、上階ほど静かで落ち着いた居心地のよい雰囲気 연출し、長期滞在型図書館を実現していること
- 間接照明を適切に設置し、落ち着いた柔らかい光で快適な学習空間・環境を提供していること
- 各種資料を探す支援のため常駐しているライブラリアンの専門性とスキルにさらに磨きがかかったこと

立命館大学図書館のコンセプトは、「学びが見える、学びに触れる、学びあえる」です。近年、グローバル化を前提とする知識基盤社会において学士レベルの資質能力を備える人材養成は重要課題として、学びの質向上が大学に問われています。とりわけ大切なのは、初年次教育での学習時間の持ち方、具体的には図書館等で自立した学習を行う習慣を身につけることです。そのためには、学びの質向上を担う「使いたくなる

図書館、使わなければならない図書館」の実現に向けた工夫が必要ではないでしょうか。

学生たちが学術的刺激や知的交流を通じて主体的な学びを確立し、新たな価値を創造・発信する拠点として、読書や思索、学習や研究、議論やプレゼンテーション、学習を通じた仲間づくりの場としてますます活用いただけることを祈念しています。

びわこ・くさつキャンパス  
三十数年の歩みと二つの図書館

大学にとってこれからも最も大切なもの

前立命館大学図書館副館長／理工学部長・理工学研究科長  
里深 好文



びわこ・くさつキャンパスは、2024年に30周年を迎えました。同キャンパスの教学展開を振り返ると、1994年の開設時に理工学部と大学院が衣笠キャンパスから拡充移転し、1998年には経済学部・経営学部とその大学院の二学部・研究科が移転し、当初、三学部・研究科体制であったものが、2026年時点では六学部・研究科体制(理工学部、経済学部、生命科学部、薬学部、スポーツ健康科学部、食マネジメント学部と各研究科)となりました。また学生数の変化をみると、1994年の開設当初、約5,000名であった同キャンパスの学生数が、現在では約13,000名となっており、ほぼ衣笠キャンパスと同じ規模となっています。

びわこ・くさつキャンパスには、1994年のびわこ・くさつキャンパス開設時に設置されたメディアセンター(自然科学系の資料を中心とした図書館)、1998年の社会科学系学部・大学院の移転時に開設されたメディアライブラリーの2つの図書館があります。これら2館の環境の変化についてみると、メディアセンターでは、2008年にライフサイエンス(生命科学)領域の教育・研究を行う生命科学部・薬学部が開設され、多くの卒業生や関連企業の方の協力により、1階の入退館ゲート近くに、ライフサイエンスに関する読み物を中心に約900冊の書籍を取り揃えた「ライフサイエンス・アカデミック

ラウンジ」が1月12日にオープンしました。このラウンジは多くの卒業生や関連企業の方の協力によって創設された「ライフサイエンス人材基金」をもとにつくられたもので、これまでのメディアセンターにはなかったゆったりとしたソファや椅子が設置されており、その落ち着いた空間は秀逸です。また、2011年に初めて衣笠キャンパスの旧図書館で設置された「びあら」(図書館では例外的に仲間とともに声を出してディスカッションをしたり、プレゼンテーションをしたりできる学習空間)が、2012年4月にメディアセンター・メディアライブラリーでも、設置され、いくつもの学生グループが仲良さげに語り合っている姿を見るにつけ、大学があるべき姿を実感しています。

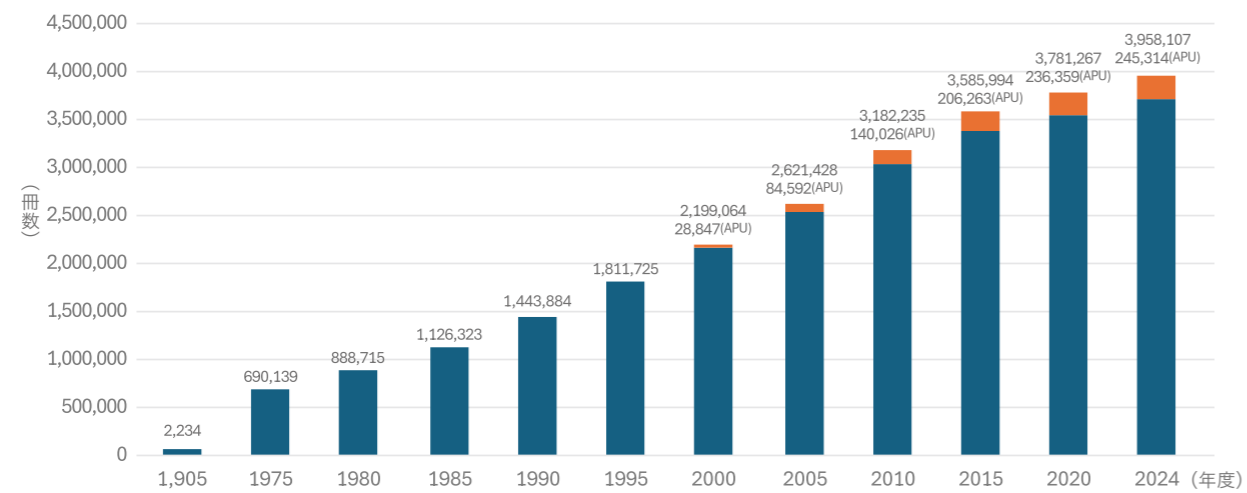
私が図書館の副館長であった際に、図書館報(Library Navigator No.132:2023年9月刊行)に書きましたが、大学は単なる職業訓練の場ではなく、人と出会い、刺激を受け、思い悩みながら成長するための場であり、立命館大学の図書館はまさにそのために必要な装置であると考えています。図書館は単なる本の置き場所ではなく、多くの人が本と出会って感動し、素敵な時間を過ごすための空間であらねばなりません。思い立った時にいつでも実物の書物に触れられる場所は、大学にとってこれからも最も大切なものであり続けると私は信じています。



立命館大学図書館の120年間を統計データで振り返ります。

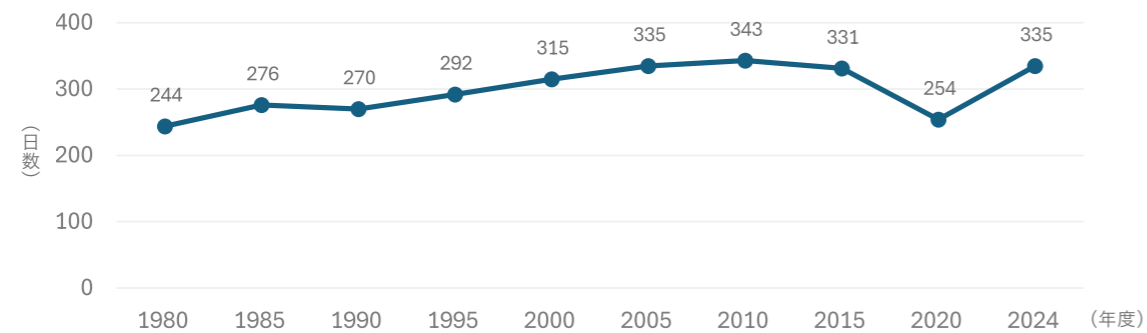
## 1 蔵書冊数

1905年に2,234冊だった蔵書冊数は120年で増加しています。2024年度には、立命館大学で約370万冊・立命館アジア太平洋大学で約25万冊となり、両大学で395万冊を超える蔵書数となっています。



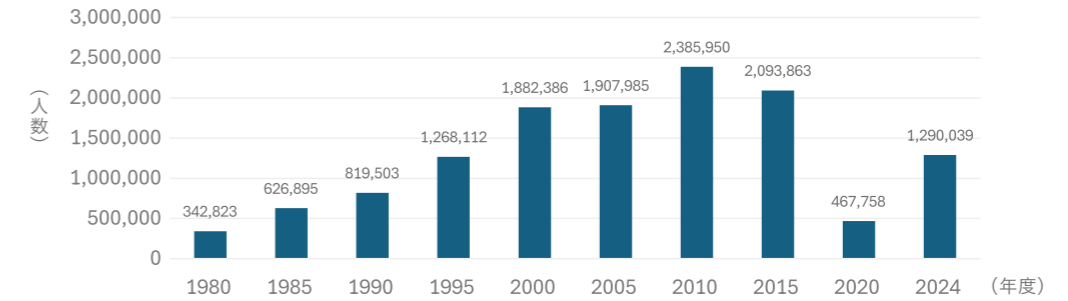
## 2 開館日数

本学では、1978年に日曜開館を実施し、その後も開館日数の増加、開館時間の延長に向けて取り組んできました。2024年度では335日開館しており、全国の大学図書館の中でもトップクラスの開館日数となっています。



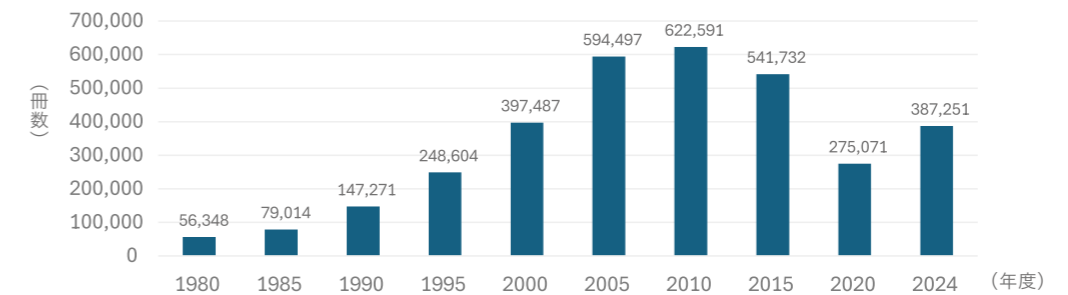
## 3 入館者数

学部・研究科の新設や環境整備の進展に伴い、利用者数は増加傾向にありました。一方で、2020年度の新型コロナウイルスの影響により学修スタイルが変化し、オンラインコンテンツの充実とともに図書館利用は多様な形へと広がりを見せています。



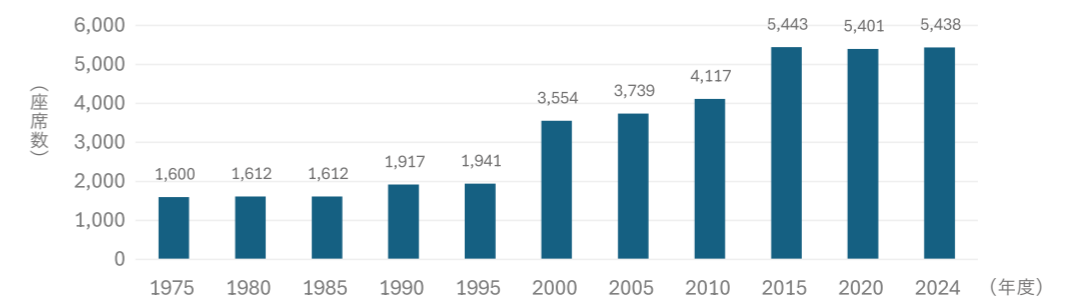
## 4 貸出冊数

1975年に3冊10日間だった学部学生の貸出冊数・期間は、現在では20冊14日間となっています。学修スタイルの変化や電子資料の利用拡大が進む中で、貸出サービスも多様な利用形態へと移行しつつあります。



## 5 閲覧座席数

もともと大学図書館は、1つの図書館から始まりましたが、現在では4つのキャンパスに7つの図書館を展開するまでに広がりました。各館の新設にあわせて、さまざまな学び方に対応できるよう、多様なスタイルの座席も整えています。



[出典] (1) 立命館大学総合情報センター『立命館大学情報センターだより』100号、2005年版  
 (2) 立命館大学図書館『図書館事業報告書』各年度版  
 (3) 立命館アジア太平洋大学『大学基礎データ』各年度版  
 (4) 日本図書館協会『日本の図書館 統計と名簿』各年度版

西暦年 (元号)	図書館施設	図書館サービス	大学のできごと
1869 (明治2)			西園寺公望、邸内に私塾「立命館」を開く。
1900 (明治33)			初代総長中川小十郎 「私立京都法政学校」設立(5月19日認可)。
1903 (明治36)	専門学校令による「私立京都法政専門学校」による組織変更。		
1904 (明治37)			・専門学校令による「私立京都法政学校」への改称。 ・大学部(法律学科、経済学科、予科)の設置、専門学部(法律科、行政科、経済科、高等研究科)設置。
1905 (明治38)	「私立京都法政大学」に附属施設として図書館・書庫を建設。	図書受入業務を開始。	西園寺公より「立命館」の名称継承の許諾を受け、大扁額を賜る。
1913 (大正2)			・財団法人立命館設立。 ・大学を「私立立命館大学」と改称。
1922 (大正11)			大学令による「立命館大学」(旧制)への昇格。
1923 (大正12)		・図書分類表を制定し、専任の図書館員を配置。 ・文庫長:跡部定次郎。	
1924 (大正13)	書庫新築 <sup>(注1)</sup> 。当時の図書館の面積は延べ357㎡。		
1925 (大正14)	図書館を改め「立命館文庫」設立 <sup>(注2)</sup> 。		
1926 (昭和元)	・立命館文庫第2期工事完成。 ・「養性館」(後「興学館」と改称)竣工。		
1931 (昭和6)		夜間開館実施。	大学法経学部の夜間授業開始。
1933 (昭和8)			京大滝川事件により京都帝国大学教授、助教授18氏を本学に招聘。
1937 (昭和12)	「西園寺文庫」創設 <sup>(注3)</sup> 。		
1938 (昭和13)			「立命館高等工科大学」設立。
1939 (昭和14)			「立命館高等工科大学」を「立命館日満高等工科大学」と改称。

【出典】(1)立命館大学総合情報センター『立命館大学総合情報センターだより』100号記念特集号、2005年

(2)立命館大学図書館『図書館事業報告書』各年度版

(3)立命館史資料センター作成「学園史年表(詳細版)」

(4)立命館百年史編纂委員会(編)『立命館百年史』通史.2.2006年

(注1)現在の平井嘉一郎記念図書館の総面積は当時の面積の約40.9倍、14,585.27㎡です。

(注2)現在使われている、本学教職員・大学院学生・学部学生・校友の著書のコレクションの名称、および、立命館出版部・京都印書館刊行物を表す「立命館文庫」とは異なります。

(注3)西園寺文庫は西園寺公望氏が生存中、大学に寄贈された有識故実、書翰、書幅などに、その後、初代総長中川小十郎氏が収集し、さらに図書館が特別に補充した資料よりなっています。

西暦年 (元号)	図書館施設	図書館サービス	大学のできごと
1940 (昭和15)	小泉琴三氏より歌書2,423冊、雑誌1,056冊受贈(後年「白楊荘文庫」となる) <sup>(注4)</sup> 。		
1941 (昭和16)			「国防学研究所」設立。
1942 (昭和17)	加古祐二郎氏より旧蔵法律書7,181冊受贈。「加古文庫」創設 <sup>(注5)</sup> 。	・全国私立大学図書館協議会に加盟。 ・「加古文庫のしおり」刊行。	
1945 (昭和20)	「立命館文庫」を「立命館図書館」と改称。	立命館文庫規則を改正し、「立命館図書館規程」制定。	・「立命館研究所」設立。 ・末川博、立命館大学学長に就任。
1946 (昭和21)		開館時間を午後8時まで延長。	「立命館土曜講座」開設。
1947 (昭和22)	「立命館図書館」を「立命館大学図書館」と改称。		
1948 (昭和23)			・法、経済、文の三学部をもつ新制の総合大学として発足(広小路)。 ・「立命館研究所」を「立命館大学人文科学研究所」に改組。
1949 (昭和24)	「理工学部分館」設置。		理工学部設置。
1950 (昭和25)	大学院校舎3階へ移転。		・大学院新制設置。 (法学・経済学・文学研究科)。 ・立命館大学短期大学部設置(1954年3月廃止)。 ・学園創立50周年記念式典を挙げる。
1951 (昭和26)		立命館大学図書館規程制定。	「財団法人立命館」を「学校法人立命館」へ組織変更。
1952 (昭和27)	研心館と書庫を曳家式工法により連結。書庫4、5階増設。		「工学研究科」設置。
1953 (昭和28)	研心館2階へ移転。	開館時間を午後8時30分まで延長。	
1954 (昭和29)	開架自由閲覧室が開設 <sup>(注6)</sup> 。		
1955 (昭和30)			「理工学研究所」設置。
1957 (昭和32)	「末川文庫」創設 <sup>(注7)</sup> 。		

(注4)白楊荘文庫には、元本学文学部教授小泉琴三(本名 藤造)博士が収集した歌集および関連する新聞・雑誌類を中心に、図書館が追加収集した資料を加えた4600余点が取られています。明治・大正から昭和20年代までの資料が体系的に収集され、このコレクションを基礎として執筆された「明治大正短歌史料大成」は当文庫の解説書でもあります。与謝野晶子・鉄幹の著書「明星」「スバル」など近代文学研究にとって貴重な資料が含まれています。

(注5)加古祐二郎教授は、1937年に33歳の若さで永眠されましたが、正味5～6年と言われる短い研究生生活の中で精力的に研究し、その結果を発表しておられました。先生の蔵書は、専門であった法哲学関係の文献の他、国家論・政治学・社会学など各分野の優れた資料が集められていました。本学に寄贈されたこれらの資料が「加古文庫」として保存されています。

(注6)現在は当たり前になっている開架閲覧室は、この当時大学図書館としては画期的な制度でした。閲覧学生数は1日500名を超えています。

(注7)末川博名譽総長の蔵書1万2千余点を所蔵しています。ここには、末川博先生の全著作はもちろん、大正から昭和期の民法学の著作・逐次刊行物・末川先生の手稿類・遺品なども取られています。また、洋書の中には留学中に入手された貴重な古書も含まれています。

西暦年 (元号)	図書館施設	図書館サービス	大学のできごと
1959 (昭和34)	「立命館文庫」(本学教職員・大学院学生・学部学生・校友の著書および、立命館出版部・京都印書館刊行物のコレクション)創設。		
1961 (昭和36)		「図書館たより」(読書週間特集号)発刊。	
1962 (昭和37)		・開館時間を午後9時まで延長。 ・「としょかんたより」(読書調査特集)発刊。	「経営学部」設置。
1965 (昭和40)	理工学部分館を「衣笠学舎分館」と改称。		・「経済・経営学部」衣笠学舎に移転。 ・「産業社会学部」設置。
1966 (昭和41)			大学院「経営学研究科」設置。
1967 (昭和42)	・衣笠学舎に新中央図書館竣工 <sup>(注8)</sup> 。 ・立命館大学図書館本館となり、広小路学舎分館発足。	逐次刊行物総合目録(第1部)発行。	
1970 (昭和45)			「産業社会学部」衣笠学舎に移転。
1971 (昭和46)			学園創立70周年記念式典を挙げる。
1972 (昭和47)		開館時間を午後9時40分まで延長(広小路分館)。	「社会学研究科」設置。
1973 (昭和48)		試験期の日曜開館実施。	
1974 (昭和49)		・「図書館だより」創刊 <sup>(注9)</sup> 。 ・「小集団貸出制度」実施。	
1975 (昭和50)		広小路学舎分館に身体障害者施設び点字図書設置。	
1977 (昭和52)	「3階閲覧室」完成(衣笠本館)。	「逐次刊行物総合目録(第2部)」発行。	
1978 (昭和53)		日曜開館実施(衣笠本館)。	「文学部」衣笠学舎に移転。
1981 (昭和56)	・「広小路分館」閉鎖。 ・「衣笠図書館書庫」完成。 ・「視聴覚室」設置。		・「法学部」衣笠学舎に移転。衣笠一拠点化完了。 ・学園創立80周年記念式典を挙げる。 ・大学衣笠移転完成。
1982 (昭和57)	船山信一名誉教授より3,000点の蔵書を受贈。(後年「船山信一旧蔵書」となる)		

(注8)1967年に竣工され、1981年に広小路学舎分館からの完全移転が完了しました。当時、衣笠キャンパスには180万冊以上の蔵書があり、1・2階が閲覧室となっていました。この図書館は平井嘉一郎記念図書館の開設に伴い、2015年度末に閉館しました。

(注9)図書館業務の現状や施策・課題などを大学構成員に的確かつ敏速に周知・徹底することを目的に刊行されました。創刊号に紹介されている各分野の「よく読まれている図書」のNo.1は次の3冊です。

松本清張全集(人文科学分野) 経済学(上)/サムエルソン、D(社会科学分野) 真空管工学/笹男利男(自然科学分野)

西暦年 (元号)	図書館施設	図書館サービス	大学のできごと
1983 (昭和58)		・「白楊荘文庫目録」刊行。 ・「図書館年次報告」刊行。	「末川記念会館」竣工。
1984 (昭和59)		・「立命館大学漢籍分類目録」刊行。 ・図書館蔵書数が100万冊を超える。	
1985 (昭和60)			「国際センター」設置。
1986 (昭和61)		・「貸出管理電算化システム」稼働 <sup>(注10)</sup> 。 ・「前期試験期貸出」実施。	
1987 (昭和62)		・「後期試験期貸出」実施。 ・「立命館大学所蔵逐次刊行物総合目録と文編」刊行。 ・「立命館大学図書館蔵原随園博士蔵書目録」刊行。	
1988 (昭和63)			・「国際関係学部」設置。 ・「国際地域研究所」設立。
1989 (平成元)		・「NACSIS-IRサービス」開始。 ・CD-ROM(J-BISC、CD-HIASK等)サービス開始。	「国際言語文化研究所」設立。
1990 (平成2)	「図書館」改修。	・初の図書館システムRUNNERS(第1期立命館学術情報システム)が稼働 <sup>(注11)</sup> 。 ・カード目録凍結。 ・「末川文庫目録」刊行。 ・「立命館大学図書館蔵西園寺文庫目録」刊行。	「教育科学研究所」設立。
1992 (平成4)		「旧米国マルクス主義研究所所蔵目録」刊行。	・「国際関係研究科」設置。 ・「国際平和ミュージアム」設置。
1993 (平成5)		・父母教育後援会会員への図書館開放。 ・バリ講和会議資料コレクションのデータベース化完成。5月運用開始。 ・図書館の地域公開開始。 ・「外国雑誌コンテンツ検索システム」稼働。	
1994 (平成6)	「BKCメディアセンター設置」 <sup>(注12)</sup> 。		・立命館大学びわこ・くさつキャンパス(BKC)開学記念式典挙げる。 ・びわこ・くさつキャンパス(BKC)開設。 ・「理工学部」BKCへ拡充移転。 ・「政策科学部」設置。
1995 (平成7)		・「マルチメディアルーム」開室(衣笠)。 ・学術館地下に書庫設置。	

(注10)貸出は、利用者カードと貸出資料をカウンターに提出して手続きするという形になりました。このシステム導入までは借りたい本1冊ごとに図書番号や学生証番号の記入が必要だったので、貸出手続きが大幅に簡略化されて利用しやすくなりました。

(注11)書名の一部や著者名などの手掛かりがあれば、全学の所蔵状況を検索できるようになりました。このシステムの稼働時のデータは図書9万件、雑誌・年鑑2万1千タイトルでした。

(注12)理工学部の拡充移転に伴い、BKCにメディアセンターが完成しました。完成当時は全面開架方式であったため、見たい資料をすぐに見ることができました。



西暦年 (元号)	図書館施設	図書館サービス	大学のできごと
1996 (平成8)		・「RUNNERSII」稼働 <sup>(注13)</sup> 。 ・開館時間延長(午後9時30分) ・開館日増(衣笠) <sup>(注14)</sup> 。	
1997 (平成9)		図書館、メディアセンター、研究部共同研究事務室、総合情報センターの統合再編による(新)総合情報センター発足。	「政策科学研究科」設置。
1998 (平成10)	「BKCメディアライブラリー」開設。	・「BKC情報サービス課」発足。 ・「メディアセンター」開館時間延長(午後8時)。	BKC新展開。(「経済・経営学部」BKCへ移転)
1999 (平成11)	図書館1階に「オープンパソコンルーム」設置(パソコン120台)。	コアデータベースの提供サービス開始 <sup>(注15)</sup> 。	アート・リサーチセンター竣工。
2000 (平成12)	・「APUライブラリー」開館。 ・「メディアセンター1F新聞・雑誌閲覧室」拡張。	・「RUNNERSIII」稼働 <sup>(注16)</sup> 。 ・開館時間を午後10時まで延長(衣笠)。	・「立命館アジア太平洋大学(APU)」創立(大分県別府市)。 ・教育科学研究所を名称変更し、「人間科学研究科」設立。 ・立命館創始130年・学園創立100周年記念立命館アジア太平洋大学開学式典を挙げる。
2001 (平成13)	「リサーチ・ライブラリー」開設(「修学館1階共同閲覧室」拡充)。	・「RUNNERSデータベースの全機能」学外公開。 ・「レファレンスライブラリアン」配置。 ・教員に対するコピーサービス開始。 ・「総合情報センターホームページ英語版」公開。 ・修学館・人文系文献資料室の土曜開館実施。 ・「学生ライブラリースタッフ」導入。	「応用人間科学研究科」設置。
2002 (平成14)		・開講期における図書館及びBKC各館の月末終日閉館を午後より開館に変更。 ・「メディアセンター自動化書庫」稼働。	言語習得センター(CLA)設置。
2003 (平成15)	・各館オープンパソコンルームのパソコン全台更新。 ・「図書館閲覧室」座席240席更新。 ・図書館グループ閲覧室にプラズマディスプレイ配備。 ・図書館改修工事(衣笠) <sup>(注17)</sup> 。	・「新たな情報リテラシー授業」開始。 ・RAINBOWガイドと図書館各案内(データベースガイドブック、衣笠編、BKC編)を「RAINBOWガイド」として1冊に統合。 ・「立命館アカデミア@大阪」に対する相互利用開始。 ・文学部司書課程受講者の図書館実習受入実施。 ・附属高校等に対する利用者サービス拡大。	・「言語教育情報研究科・先端総合学術研究科」設置。 ・「アジア太平洋研究科、経営管理研究科」(APU)設置。

(注13) 蔵書検索システム(RUNNERS OPAC)をインターネット上に公開しました。発注中・整理中の資料でも利用者が確認できるようになりました。  
 (注14) 従来は休館としていた大学の休業期間中も開館し、開館日が大幅に増えました。  
 (注15) インターネット時代に対応して、学習・教育・研究と密接に関連する学術情報データベースの無料提供を開始しました。  
 (注16) 立命館アジア太平洋大学(APU)の学術情報システムと統合しました。また、オンラインでの予約・取寄せ申込ができるようになりました。  
 (注17) 各階のトイレを改修し、全館のカーペットを新しくしました。また、閲覧座席(1,460席)の椅子も入れ替えました。

西暦年 (元号)	図書館施設	図書館サービス	大学のできごと
2004 (平成16)	・「ローライブラリー」開設。 ・修学館1階・3階・5階、洋館5階に貸出手続確認装置設置。 ・メディアセンター自動化書庫稼働。 ・衣笠図書館とメディアセンターに自動貸出機を設置。	・「RUNNERSIV」稼働 <sup>(注18)</sup> 。 ・「全学リコール制」導入。 ・学術情報施設利用規則および同施行細則施行 <sup>(注19)</sup> 。 ・「RUNNERS携帯電話サービス」開始。 ・MyLibraryサービスの提供を開始 <sup>(注20)</sup> 。	・「法科大学院」設置(西園寺記念館)。 ・「情報理工学部」設置。
2005 (平成17)		・立命館大学図書館開設100周年記念シンポジウム「大学図書館の未来、本の未来」、展示会「白川静と立命館」を開催。 ・「総合情報センターだより」100号記念特集号を発刊。	・「テクノロジー・マネジメント研究科(MOT大学院)」を設置(BKC)。 ・「立命館孔子学院」設置。
2006 (平成18)	朱雀リサーチライブラリーを開設。	・教員・院生への返却予告メールを開始。 ・電子ジャーナル管理ツールを導入。 ・長期休暇中の中高生へのメディアライブラリー・メディアセンター公開(オープンライブラリー)を開始。 ・「総合情報センターだより」102号より、「図書館だより」へ誌名を変更。 ・図書館ホームページをリニューアル。	・「経営管理研究科」設置。 ・「立命館憲章」制定。 ・朱雀キャンパス開設(京都府京都市)。
2007 (平成19)	「衣笠図書館空調設備」改修。	・「温家宝首相」来館。 ・「私立大学図書館協会西地区部会総会」開催。 ・立命館大学図書館開設100周年記念展覧会・シンポジウム「立命館と立命館をめぐる文人たち」を開催。 ・「図書館だより」104号より紙面刷新、「Library Navigator」へ誌名を変更。 ・読楽コーナーを開設。	・「映像学部」を設置。 ・「公務研究科(公共政策大学院)」を設置。
2008 (平成20)		・RUNNERSVを稼働。ネットワーク型入館ゲートを導入。 ・機関リポジトリ「R3(R-Cube)」の運用を開始。 ・OPACからの電子ジャーナル検索と、携帯電話からの貸出延長を実現。 ・読楽コーナー図書学生の選書を開始。 ・教員お薦め本コーナーを開設。	・「生命科学部」、「薬学部(6年制)」設置(BKC)。
2009 (平成21)		・全学研究用図書予算の執行方法を変更(館別分野別)。 ・「佐伯千仞文庫」目録の刊行。 ・メディアセンターに「ライフサイエンス・アカデミックラウンジ」を開設。 ・開館時間を8:30に繰上げ。 ・衣笠図書館書庫を学部学生にも開放。	

(注18) 新システム導入と同時に MyLibrary も導入し、Web での貸出延長や電子ジャーナルの検索、横断検索などが可能となりました。  
 (注19) リコール制度や、学部学生に対する研究図書の館外貸出などを実施しました。  
 (注20) 利用者自身による電子ジャーナルリストの作成機能、本学が購入しているデータベースの横断検索機能、携帯電話からの蔵書検索が出来るようになりました。また、NACSIS-Webcat との連動が可能になり、学外の資料が探しやすくなりました。

# History of Library 立命館大学図書館 120年のあゆみ



西暦年 (元号)	図書館施設	図書館サービス	大学のできごと
2010 (平成22)	「白川静文庫」の開設。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・リザーブブック制度を開始。</li> <li>・e-DDS(Electronic Document Delivery Service)を開始。</li> <li>・「オンライン学習ツールRA(Ritsumeikan Academic Information Literacy)」運用開始。</li> <li>・RUNNERS蔵書検索システムの検索結果に館内マップを表示。</li> <li>・図書館ドリンクポリシーの策定。</li> <li>・「立命館大学図書館蔵白川静文庫目録」刊行。</li> <li>・立命館創始140年・学園創立110年、白川静生誕100周年白川静文庫開設記念展開催。</li> </ul>	「スポーツ健康科学部」、大学院「スポーツ健康科学研究科」設置(BKC)。
2011 (平成23)	衣笠図書館にラーニング・commons「びあら」を開設。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大学図書館イメージキャラクター「よむりす」誕生。</li> <li>・図書館所蔵貴重書のアーカイブ化「デジタルコレクション」。</li> <li>・衣笠図書館の視聴覚コーナーをリニューアル。</li> </ul>	「映像研究科」設置。
2012 (平成24)	メディアセンターとメディアライブラリーにラーニング・commons「びあら」を開設。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・RUNNERSVIを稼動。</li> <li>・学術情報検索サービス「RUNNERS Discovery Service」を開始。</li> <li>・情報管理ツール「RefWorks」サービスを導入。</li> <li>・衣笠図書館、メディアセンター、メディアライブラリーの「びあら」に大型タッチパネルディスプレイを導入。</li> <li>・衣笠図書館に「新聞掲示板」を設置。</li> </ul>	「情報理工学研究科」「生命科学研究科」設置。
2013 (平成25)		<ul style="list-style-type: none"> <li>・博士論文の機関リポジトリへの掲載開始。</li> <li>・SCOAP3(スコープスリー、Sponsoring Consortium for Open Access Publishing in Particle Physics)への参加開始。</li> <li>・「BOOKS FOR BOOKS ～立命館の本活～」開始。</li> <li>・私立大学図書館協会の会長校就任(2013～2014年度)。</li> </ul>	
2014 (平成26)		国立国会図書館デジタル化資料送信サービスを導入。	「薬学研究科」設置(BKC)。
2015 (平成27)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大阪いばらきキャンパス開設にあわせてOICライブラリーを開設<sup>(注21)</sup>。</li> <li>・衣笠図書館を閉館。新たな図書館の建設に伴い、2015年度末をもって閉館。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ライブラリーカードのICカード化実施。</li> <li>・図書館で利用できる施設のオンライン予約サービス。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大阪いばらきキャンパス(OIC)開設。</li> <li>・「経営学部、経営学研究科、政策科学部、政策科学研究科、経営管理研究科、テクノロジーマネジメント研究科」OIC移転。</li> </ul>
2016 (平成28)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・衣笠キャンパスに平井嘉一郎記念図書館を開設(旧衣笠図書館は、2017年1月末に解体され、その後の跡地は「東側広場」として整備)。</li> <li>・「加藤周一文庫」の開設。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「図書館秋まつり」を開催。</li> <li>・京都国連寄託図書館の移管。</li> </ul>	総合心理学部設置(OIC)。

(注21) 本学図書館で初めて、これまでのタルテープに代わってICタグを導入。貸出・返却や蔵書点検が効率的に行えるようになりました。その後、2016年に平井嘉一郎記念図書館、2018年にメディアセンターとメディアライブラリーでもICタグによる管理を開始しました。

西暦年 (元号)	図書館施設	図書館サービス	大学のできごと	
2017 (平成29)		<ul style="list-style-type: none"> <li>・平井嘉一郎記念図書館内にILOコーナーを開設。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・2017年度図書館総合展で開催された第3回目となる「図書館キャラクター・グランプリ」に「よむりす」(図書館キャラクター)を応募し、「カルチャー・ジャパン賞」を受賞。</li> <li>・図書館内のドリンクポリシーを一部見直し。</li> <li>・立命館大学図書館ホームページに研究支援情報のページを開設。</li> </ul>	「教職研究科」設置(朱雀)。
2018 (平成30)		<ul style="list-style-type: none"> <li>・RUNNERSVIIを稼動。</li> <li>・大阪府北部地震によりOICライブラリーも天井の崩落や壁面のひび割れ、自動ドアや窓枠の破損、機器の転倒と図書資料の落下などの被害を受け6月18日～24日の間(7日間)臨時休館。</li> <li>・平井嘉一郎記念図書館において、地下1階に設置していた京都国連寄託図書館が2018年3月4日をもって本学の約30年間に及ぶ利用提供に幕を閉じ、京都外国語大学にバトンを引き継ぐ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「応用人間科学研究科」を再編し、「人間科学研究科」設置。</li> <li>・「食マネジメント学部」設置(BKC)。</li> </ul>	
2019 (令和元)			「グローバル教養学部」設置(OIC)。	
2020 (令和2)		<ul style="list-style-type: none"> <li>・図書館ホームページリニューアル。</li> <li>・立命館学術成果リポジトリ(R-Cube)をリニューアル。</li> <li>・新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けて、2020年4月8日から5月31日までは臨時休館。</li> <li>・秋学期以降、VPN接続できる回線数を3,500まで拡大し増強、電子リソースも増強。</li> <li>・新型コロナウイルスの感染拡大により、従来の対面型利用者サービスの維持とともに、来館してサービスを受けることの出来ない利用者のために、非接触型の利用者サービスの開発や新たな展開が試行(感染予防対策を強化)。</li> </ul>		
2021 (令和3)			「食マネジメント研究科」を設置(BKC)。	
2022 (令和4)		学部学生向けに図書返却期限通知メールのサービスを開始。		
2023 (令和5)	2023年3月、窓口に設置していたビニールカーテン、閲覧席の飛沫防止パネルの撤去、座席の間引きの終了などコロナ禍以前の利用環境を回復。			
2024 (令和6)	学外者に見学等を認めている4館(朱雀リサーチライブラリーを除く)で、最もカウンターに近いゲートのICカード認証機器に、新たにQRコード認証機能を追加。	サービスカウンターおよびレファレンスカウンターでの各種申請を、新システム(Zendes)を用いたWEB申請に変更。	「情報理工学部」「映像学部」が大阪いばらきキャンパス(OIC)に移転。	
2025 (令和7)	図書館開設120周年。			

# Library Directors History

## 歴代館長一覽



年度	和暦	役職名	氏名	備考	役職名	氏名	備考
1923	大正12	文庫長	跡部 定次郎	1923.8就任			
1924	大正13	文庫長	跡部 定次郎				
1925	大正14	文庫長	跡部 定次郎				
1926	大正15	文庫長	和田 三良	1926.12就任			
1927	昭和2	文庫長	和田 三良				
1928	昭和3	文庫長	和田 三良				
1929	昭和4	文庫長	和田 三良				
1930	昭和5	文庫長	和田 三良				
1931	昭和6	文庫長	和田 三良				
1932	昭和7	文庫長	跡部 定次郎				
1933	昭和8	文庫長	跡部 定次郎				
1934	昭和9	文庫長	黒田 覚	1934.1就任			
1935	昭和10	文庫長	磯崎 辰五郎				
1936	昭和11	文庫長	磯崎 辰五郎				
1937	昭和12	文庫長	大岩 誠	1937.12就任			
1938	昭和13	文庫長	大岩 誠				
1939	昭和14	文庫長	和田 三良	1937.12就任			
1940	昭和15	文庫長	和田 三良				
1941	昭和16	文庫長	和田 三良	1942.3退任			
1942	昭和17	文庫長	熊谷 八十三	1942.3就任			
1943	昭和18	文庫長	熊谷 八十三				
1944	昭和19	文庫長	熊谷 八十三	1945.2.1退任			
1945	昭和20	館長*1	竹田 直平	1945.1.21就任			
1946	昭和21	館長	竹田 直平	1946.5退任			
1947	昭和22	館長	天野 利武	1946.6就任			
1948	昭和23	館長	天野 利武	1947.1退任			
1949	昭和24	館長	平田 隆夫	1947.1就任			
1950	昭和25	館長	平田 隆夫	1951.1退任	分館長(衣笠キャンパス)*2	増野 肇	1949.10就任
1951	昭和26	館長	淡川 泰一	1951.1就任	分館長	増野 肇	
1952	昭和27	館長	淡川 泰一		分館長	浅井 潔	
1953	昭和28	館長	淡川 泰一	1953.4退任	分館長	浅井 潔	
1954	昭和29	館長	山元 一郎	1953.4就任	分館長	浅井 潔	
1955	昭和30	館長	山元 一郎	1956.7退任	分館長	橋本 次郎	
1956	昭和31	館長	井上 次郎	1957.7就任	分館長	田中 正三郎	
1957	昭和32	館長	井上 次郎		分館長	田中 正三郎	
1958	昭和33	館長	井上 次郎	1958.12退任	分館長	羽村 二喜男	
1959	昭和34	館長	藤田 久規	1958.12就任	分館長	羽村 二喜男	
1960	昭和35	館長	藤田 久規	1960.9退任	分館長	遠藤 外雄	
1961	昭和36	館長	三田村 泰助	1960.10就任	分館長	武田 英吉	
1962	昭和37	館長	三田村 泰助	1962.8退任	分館長	武田 英吉	
1963	昭和38	館長	浅井 清信	1962.9就任	分館長	深川 俊男	
1964	昭和39	館長	浅井 清信	1964.4退任	分館長	深川 俊男	
1965	昭和40	館長	武藤 守一	1964.4就任	分館長	村上 一男	
1966	昭和41	館長	武藤 守一		分館長	村上 一男	
1967	昭和42	館長	国崎 望久太郎		分館長(広小路キャンパス)*3	大西 芳雄	
1968	昭和43	館長	建林 正喜		分館長	大西 芳雄	
1969	昭和44	館長	建林 正喜		分館長	大西 芳雄	
1970	昭和45	館長	井上 晴丸		分館長	奥村 三舟	
1971	昭和46	館長	井上 晴丸		分館長	奥村 三舟	

\*1 「立命館図書館」に名称変更 \*2 衣笠学舎に「理工学部分館」設置 \*3 衣笠学舎に「中央図書館」完成。広小路図書館は分館となる。

年度	和暦	役職名	氏名	備考	役職名	氏名	備考
1972	昭和47	館長	池田 誠		分館長	和田 繁二郎	
1973	昭和48	館長	池田 誠		分館長	和田 繁二郎	
1974	昭和49	館長	野久尾 徳美		分館長	福田 晃	
1975	昭和50	館長	野久尾 徳美	1975.4.1~09.30	分館長	和田 繁二郎	館長兼務
1976	昭和51	館長	和田 繁二郎	1975.11就任	分館長	和田 繁二郎	
1977	昭和52	館長	和田 繁二郎		分館長	井戸田 侃	
1978	昭和53	館長	岡崎 栄松		分館長	宮地 國敬	
1979	昭和54	館長	岡崎 栄松		分館長	井上 正三	
1980	昭和55	館長	杉田 嘉一郎		分館長	山下 健次	
1981	昭和56	館長	杉田 嘉一郎				
1982	昭和57	館長	杉田 嘉一郎				
1983	昭和58	館長代行	古川 勝弘	1983.5退任			
1984	昭和59	館長	杉田 嘉一郎	1983.5就任 1983.9退任			
1985	昭和60	館長	奥田 修三	1983.9就任			
1986	昭和61	館長	奥田 修三				
1987	昭和62	館長	後藤 靖				
1988	昭和63	館長	後藤 靖				
1989	昭和64	館長	明石 外世樹	1988.1退任			
1990	平成2	館長	戸木田 義久	1988.1.29就任 (副学長の兼務)			
1991	平成3	館長	菅沼 良治				
1992	平成4	館長	西川 富雄				
1993	平成5	館長	西川 富雄				
1994	平成6	館長	衣笠 安喜	1990.7退任			
1995	平成7	館長	佐藤 智三	1990.8就任			
1996	平成8	館長	佐藤 智三				
1997	平成9	館長	中原 章雄				
1998	平成10	館長	中原 章雄		メディアセンター長*4	大野 豊	
1999	平成11	館長	中井 美雄		メディアセンター長	深海 浩	
2000	平成12	館長	中井 美雄		メディアセンター長	深海 浩	
2001	平成13	館長	久岡 康成		メディアセンター長	深海 浩	
2002	平成14	館長	佐藤 嘉一				
2003	平成15	館長	佐藤 嘉一				
2004	平成16	館長	大戸 千之				
2005	平成17	館長	大戸 千之				
2006	平成18	館長	大戸 千之				
2007	平成19	館長	大瀬戸 豪志				
2008	平成20	館長	水口 憲人				
2009	平成21	館長	水口 憲人				
2010	平成22	館長	水口 憲人				
2011	平成23	館長	上田 寛				
2012	平成24	館長	宝月 誠				
2013	平成25	館長	宝月 誠				
2014	平成26	館長	吉田 美喜夫		副館長	高倉 秀行	
2015	平成27	館長	吉田 美喜夫		副館長	高倉 秀行	
2016	平成28	館長	和田 晴吾		副館長	山崎 正史	
2017	平成29	館長	北尾 宏之		副館長	川越 恭二	
2018	平成30	館長	平野 仁彦		副館長	川越 恭二	
2019	令和元	館長	平野 仁彦		副館長	高山 茂	
2020	令和2	館長	二宮 周平		副館長	高山 茂	
2021	令和3	館長	二宮 周平		副館長	高山 茂	
2022	令和4	館長	板木 雅彦		副館長	高山 茂	
2023	令和5	館長	板木 雅彦		副館長	高山 茂	
2024	令和6	館長	重森 臣広		副館長	大西 淳	
2025	令和7	館長	重森 臣広		副館長	大西 淳	

\*4 びわこ・くさつキャンパスへ理工学部拡充・移転にともない、メディアセンター設置  
\*5 総合情報センターに再編統合。図書館・修学館・人文系文献資料室・メディアセンター・メディアライブラリーを統括。

**R** RITSUMEIKAN  
UNIVERSITY

立命館大学図書館だより  
— Library Navigator — 開設120周年記念特集号

発行：立命館大学図書館  
住所：〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1  
電話番号：TEL 075-465-8217  
URL：<https://www.ritsumei.ac.jp/lib/>  
発行年月：2026年4月